

最幸の瞬間（とき）を共有する～第78回卒業証書授与式迫る～

先週あたりからは、日差しがまぶしく、暖かい日が増えてきました。春を感じるようになってきました。そんななか、本日、明日の第78回卒業証書授与式のための予行練習が実施されました。1、2年生も練習に参加し、3年生が義務教育最後の授業へ臨む姿を目に焼き付けていました。

日常の長い人生の中には、大切な節目があります。そのなかでも義務教育9年間を修了する15歳という年齢は、大きな人生の節目であると言われます。だからこそ、中学校の行事のなかでは、義務教育最後の授業である『卒業式』が最も重要な行事であると言えます。明日は、この大切な節目を飾るにふさわしい式典としてほしいと思います。そして、このような場面で必要なことは「行動の美しさ」です。「立ち居振る舞い」を意識することが大切になります。正しい立ち姿、そして立礼。これらは言葉を使わない非言語コミュニケーションの典型です。卒業生のみなさんには言葉や、姿や立礼の中に、感謝や尊敬の念、その他言葉に言い尽くせない真心を込めてほしいと思います。卒業生は、人生の節目の瞬間を、姿勢、所作（しよさ）、返事そして呼びかけ（言葉）に想いを込めます。今日の予行練習では、その卒業生の姿と向き合った在校生の1、2年生にとっても、大切な機会となったことでしょう。今日の予行練習も明日の本番と同じように厳粛な空気の流れる中での見事な式典となりました。明日は、全校生徒全員で、日本一最幸の卒業式を創り、全校生徒全員で感動、感涙を共有しましょう。

卒業生は3年間に及ぶドラマを経験した。

特に義務教育最後となったこの1年は、敷島中の最高学年・リーダーとしての責任を感じ、

さらに進路を切り拓いていかなければならないプレッシャーもあったにちがいない。

しかし、3年生は一人一人の想いを抱えながら、集団で喜怒哀楽を共有し、「つながる」ことを通して、集団から仲間（クラス）へと成長していった。

そして、日々の授業や部活動、数々の学年・学校行事に精一杯取り組んできた。

そのとき君たちの瞳は輝いていた。そのとき、君たちの凛々しい姿がまぶしかった。

みんながみんな、ひたむきな気持ちで集中する姿に心が洗われた。

3年間におよぶドラマは決してシナリオ通りに展開されることばかりではなかった。

シナリオが崩れ、思い通りにいかないことに悩み、仲間との衝突もあったにちがいない。

それでも前進を続けた。あきらめずに前進を続けた。

この3年間のドラマを経験したことによって、君たちの輝きは増し、心は浄化をとげた。

この敷島中で得たことを、明日からも生かしてほしい。

新しい春からも生かしてほしい。



震災は終わっていない～3.11 東日本大震災から 14 年～

泥だらけのランドセルが何十、いや何百も無造作に積み上げられていた。

その一つ一つに名前が書いてある。阿部、沼田、小菅・・・。「さがしています」の張り紙には生後 8 ヶ月の男の子の笑顔のカラー写真が印刷されていた。

みんな無事か。どこかで救助され、一時的に親とはぐれているのではないか。そう信じたかった。

東日本大震災の 2 ヶ月後、訪ねた避難所の光景が目には焼き付いている。

小学一年生だった木村汐凧（ゆうな）ちゃんが見つかったのは、震災から 5 年目。

がれきの山にあったマフラーに小さな骨が数個含まれていた。

原発事故で誰も入れなくなった福島県大熊町の海岸。自宅のそばだった。

捜索を阻んだのは放射能だ。すぐに捜せば見つかったのでは。

「こんなことなら海に流されて一生見つからなければよかった」

父紀夫さんの慟哭（どうこく）を当時の記事で読んだ。

きょう、震災から 14 年目の朝を迎えた。

警察庁によると、津波にのまれ、まだ見つからない人は 2520 人。

行方不明者がいる家族の心情を心理学では「さよならのない別れ」と呼ぶ。

心はあの日で止まっている。

紀夫さんは、汐凧ちゃんの残された体を探し続けている。

3歳の長男を捜す別の父は、「抱きしめて、謝りたい」と語っている。震災は終わっていない。（新聞朝刊より）



『行動の美しさ』～人を大切にする力～

先日、学校の方にさくら連絡網を通して、本校の生徒の「美しい行動」に対して、丁寧な「お礼」のメールをいただきました。2月26日（水）のことでした。3年2組の鈴木悠斗さんと3年3組の太田陸翔さんが、下校をしていたときに、学校前の通りで、友だちの家に向かおうと自転車に乗っていた小学生の男の子が、強い風にあおられて、転倒をしてしまったそうです。その男の子は、転倒した際、痛そうにしていたそうです。手から血も流れていたそうです。そのとき前を歩いていた本校の1年生の女子（1年2組石川怜璃さん、柳澤千穂さん）も駆け付けてくれて、手から出ていた血をふくためのティッシュや絆創膏を渡してくれたそうです。鈴木さんと太田さんは、それを使って男の子に応急処置をしてあげたそうです。その後も心配だったので、鈴木さんと太田さんは、その小学生が自転車をひいて移動する際、島上条公園まで付き添ってあげたそうです。メールをしてくださったその小学生のお母さんは、「大きな怪我ではなかったけれど、本人もとても心強かったと申しておりました。受験期で物理的にも気持ち的にも差し迫っている状況のなかで、このような行動、勇気があることは素晴らしいと思います。本当に素晴らしい生徒さん方ですね。その他にも協力していただいた中学生も含めて、直接お礼が言えませんでしたので、是非この気持ちをお伝えください。」とのことでした。2人に聞いたところ、けがをして困っている人を放っておけなかったと話してくれました。



3月6日（木）朝、登校する生徒を迎えようと私が校門のところに行った時のことです。2年1組の小池夏熙さんが慌てた様子で、「人が倒れています」と教えてくれました。小池さんに案内してもらって、中学校の下の信号を右折したところ、グラウンド南側の道路で倒れている高齢の男性がいました。上体を起こしていましたが、声をかけると自力では立ち上がることができない様子でした。また手を擦りむいており、痛そうにしていました。他の先生方にも協力していただき、救急車を要請しました。小池さんは、歩いて通学する途中、左側の道路上に倒れている方を発見し、学校まで走ってきて教えてくれました。道路に倒れていたため、何かあってはいけないと判断し、教えに来てくれました。



これらの敷島中生の姿から、人間の行動の美しさを感じました。私たち敷島中学校は、これからも「行動の美しさ」を大切にしていきたいと強く思いました。